

登山者のサポート強化

北アルプス常念岳や涸沢 急医療ネットワーク実験」など三カ所にある大学山岳診療所を衛星通信で結び、

信州大病院

多額なコストがかかるのが難点で、経費が安い地上波も使って山岳での総合的な遠隔診療を構築し、急増する中高年登山者を支援するの狙いだ。

州大病院（長野県松本市）は二十日、新たに地上波を加えた「北アルプス山岳救

地上波も結んで 山岳と遠隔治療

かを判断する。実験には名古屋市立大なども加わり、初日は映像や音声などの送受信状況をチェックした。

今回の実験は、山小屋などにある診療所から患者の心電図や血圧、外傷の状態などの映像や医師の音声の情報を地上波無線で平地の経由地に送り、CATV回線やパソコンによる高速インターネット通信で情報を受けた信大病院などが、診療をサポートする。

衛星通信は機材費などで一千万円を超え、通信費も一分間五百円ほどかかるが、地上波システムは小型無線機など計百五十万円ほどで済む利点がある。無線の到達範囲が限られる点は、複数の診療所を中継することでもクリアした。

名古屋市立大は一九九八年、蝶ヶ岳に診療所を開設しており、通信実験で浅井清文助教は「昨年は一カ月で高山病などで約二百人を診察した。山の上では処置が限られ、昨年は映像なども送れなかった。地上の専門医のアドバイスがあるのは大変心強い」と話した。信州大は近く、地上波基地を計四カ所に増やすという。